

釣燈籠考

川 勝 政 太 郎

一 序 言

釣燈籠は屋内または軒端などに釣るもので、神仏に対する献燈具、あるいは建物に付属する照明の器具である。歴史的にも美術工芸的にも研究すべき面が多々あるのであるが、従来釣燈籠について通説したものがほとんどなかった。金燈籠や釣燈籠に関しては、故香取秀真氏（昭和二九没）の研究業績が著しく、釣燈籠関係については『金工史談』（昭和一六・一二）に収録された「釣燈籠と燭台」と、第八回東京鑄金会展覧の際に作成された『日本金燈籠年表』（大正五・三）がある。奈良在住の金石史家故高田十郎氏が、春日大社に現存する千基に近い釣燈籠を調査し、「奈良春日神社の釣燈籠の銘文一〇一二」（なら第一九〇四七、大正一二・八〇昭和二・一二）にまとめられた努力は記憶さるべきである。また金工史専門の前田泰次氏の「釣燈籠及び雪見燈籠雑考」（画説四、昭和一二・四）の如き論考がある。しかし釣燈籠の歴史をまとめて書いたものがない。もっとも社団法人照明学会の『日本古灯器大観』（昭和六・三）には、かなりの数の釣燈籠が採録され、写真と解説はあるが、歴史を通説する本文がない。

たまたま筆者は近年『燈籠』（昭和四八・二）の書中に、石燈籠・金燈籠・釣燈籠全体にわたる記述を行なったが、この書が大形の豪華本であり、限定出版であったため、多くの方々に読んで頂くことができなかった。ここに改めて釣燈籠だけに目標をしばって記述し、大方の御教示を乞いたいと思う。

釣燈籠の資料については、年来心がけて集めて来た。しかし最近の市町村史刊行の盛んなことにつれて、金石文資料として釣燈籠も各地で注目され採録されて来たにちがいないが、筆者の目の届かぬ所が多々あると思う。

ここに特筆すべきは、最近に至って、従前学界未知の鎌倉時代在銘の釣燈籠が、京都国立博物館に寄贈され、はじめて公開されたことである。そうしたこともあって、この小文は前稿以後の知見を加えて、釣燈籠について通説してみようとするものである。

二 形式と種類

釣燈籠の材料としては、木・銅・鉄が普通である。木製の釣燈籠は古くは多く作られたかも知れぬが、保存に適さぬためか古遺品は春日大社に存する二点のみである。

最も多いのは銅製釣燈籠である。鉄や銅の釣燈籠には、鑄造のものほかに、板金で作られたものがある。ことに近世では、いわゆる飴金具かざりなどを作る飴師によって作られた銅板金細工のものが多くなり、鑄造ものとはちがった発達をとげたものがある。

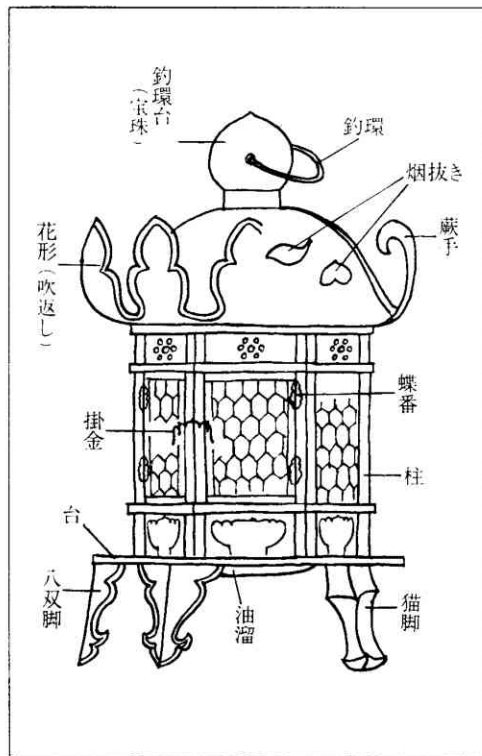
釣燈籠の形式としては、一番下に台があり、この上に火袋をのせ、ついで笠を作り、頂上に釣環つりかんだいを置き、これに釣環を通す。釣燈籠は釣り下げる使用法のために、全部を一時に鑄上げる「まる吹き」にするか、鋳などで留めて部分を固定するかしなければならぬ。

次に各部分について記しておく。(第一図)

台 台の板だけで、脚をつけぬものもあるが、多くは脚がある。釣り下げるものであっても、形の上からは脚のある方が整う。

鑄造ものの脚はまる吹きの場合と、別に作ってとりつけたものがあるが、多くは小さい猫脚ねこあしである。板金製のはこれに反して八双脚はっそうあしのように派手な形が一般的である。扉に打つ八双金具の系統の形で、その面には唐草

釣燈考籠



第一図 釣燈籠部分名称図

文様や魚子ななこ（小さい粒を敷きつめたもの）を蒔いたものと、無地のとがある。

火袋 内部に燈火を入れるため、側面の中区一面または二面を扉として開閉できるようにする。扉は蝶番ちようつがいで柱にとりつけ、戸じまりのために掛金がつけてある。扉をふくめて中区各面には透しの文様を作る。各面同じ文様にするもの、一面づつ文様をかえるものなど、いろいろの手法が見られる。また火袋の下区は格狭間くわざまなどを彫って飾り、上区は文様を透し彫りにし、火袋には皿状の油溜りたまを作る。

金燈籠では、火袋の中区に白紙を内部にはり、燈火を入れた時に文様は影面になって、石燈籠の火袋とはくらべものにならぬ面白さがある。

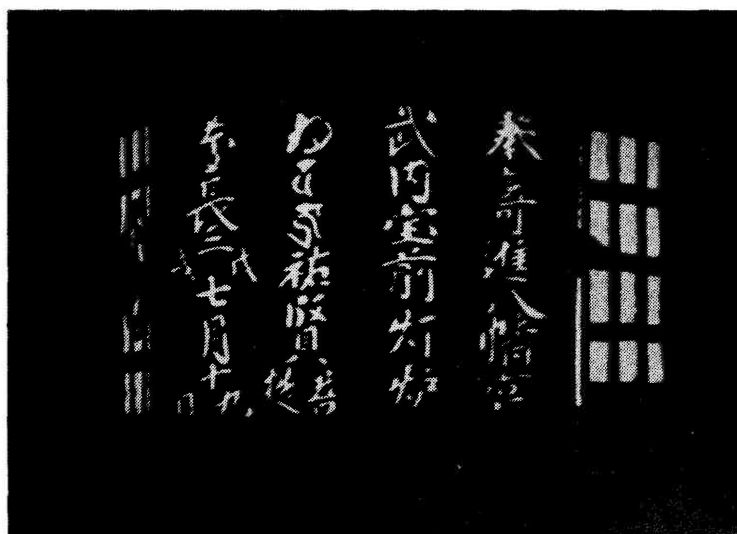
透し彫りには文様の形を残して空間を透す切り透しと、それとは反対に文様自体を透して空間を残すものがある。陽の透し・陰の透しといってもよい。

なお釣燈籠で年月や願主名などの銘文を火袋の柱に陰刻するものがあると同時に、中区に文字を透し彫りにしたのもある。これにも陽透しと陰透しとがある。京都北村謹次郎氏所蔵の桃山時代慶長三年（一五九八）鉄製釣燈籠の陰透しの銘文を、燈火を入れて透して見た写真（第二図）を掲げておく。釣燈籠独特の興趣が感じられる。

透し彫りの場合、文様や文字がはずれないように「つり」をたくさん作らねばならない。文様自体が連続して「つり」の用を果す場合もある。しかし文字はそういうぐあいにはいかぬ。この写真で見える文字の線があちらこちら切れているのは、そこを「つり」にしているのである。

笠 釣燈籠に限らず金燈籠一般の笠につけられる葺手は、軒から長くのばした形のもを打ちつけてあり、石燈籠のようにきゅうくつな形ではない。早葺の先端の曲った形に似ているので葺手というのである。むろん葺手も何もつけない笠もある。

笠の周縁を六角形その他に切りはなしただけのと、線形から成る花形に切りこんだものがある。板金細工の釣燈籠では、この周縁の花形を上



第二図 釣燈籠の透彫銘文

へ反らして吹き返しに作るのが普通である。あたかも台下の派手な八双脚に対応するようになっていいる。吹き返しの花形の外面には文様を打ち出したものも、無地のものもある。

釣燈籠では火袋が比較的小さいので、燈火の熱を発散させる必要があり、そのために笠には烟抜き孔がいくつか作られる。蓮弁の一片を散らした形の散蓮華や、ハート形をした猪の目が多く用いられ、それらの形を陰透しにする。実用に加えて笠の装飾文様となっている。

釣環台 つりかんだい 笠の頂上に作りつけて、装飾に兼ねて釣環を通す台の役目をする。多くは宝珠形であるが、他の形のものもある。たとえば立方体の八隅を切り落した「切り子」などが見られる。置燈籠も釣燈籠の系統で、釣環がないわけである。

釣燈籠の部分の名称などについては以上で終り、次には釣燈籠の種類を見てみよう。

普通形

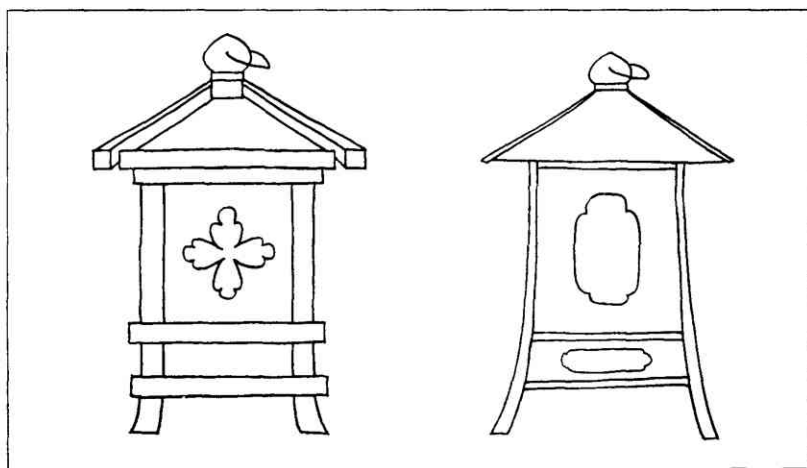
台から釣環台までを備えたもので、平面の形により四角・六角・八角・円などに分類する。各部分の平面の形が統一されていない場合も相当ある。そのような時には火袋と笠、火袋と台といった主要部分の形によって型を決める。たとえば台が六角、火袋は円形に近いが六面に分けてあり、笠は円形といった場合には、六角型に分類する。

四角型 清涼殿の釣燈籠と称する形式が代表的のものである。鉄板製で方形の笠を頂き、火袋は四方に木瓜型の窓をあけ、腰張りの所にも横長の木瓜型を透かす。四隅の柱の延長が下方でひろがって脚になる。

現在の京都御所清涼殿にも用いられている。しかし木瓜型や脚のひろがりの形から見ると平安時代風でなく、近世の形式と思われる。京都の平安博物館には清涼殿の一部分を実物大に復原してあるが、その軒先には平安時代風に復原した釣燈籠が一つある。但し木製で鉄色に塗ってある。窓を古風な四葉の花形にし、脚の開きも少い所など考えられた点であろう。(第三図)

『春日権現靈驗記絵巻』第十巻に、春日大社々殿向拝の軒先に、布で作った綱で釣った四角型

釣燈籠考



第三図 清涼殿釣燈籠二種

(第四図右)が見られる。板金製で、笠には蕨手がつけてある。この絵巻は延慶二年(一一三〇九)の製作で、当時このような四角型が行なわれたのであろう。春日大社には江戸時代天保三年(一八三二)に造立された四角型鉄釣燈籠があって、御験記型といわれているが、これは蕨手がなく、前記の清涼殿燈籠と同系である。広島県尾道浄土寺にある四角型は、南北朝時代の古い遺品である。

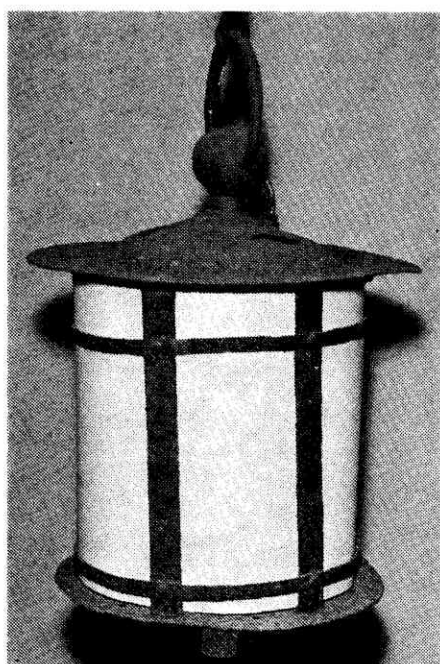
六角型 釣燈籠の中では六角型が一番多く作られたようであり、遺品も六角型がほとんどを占める。四角型が比較的軽快であるのに対し、六角型は荘重感があるため社寺奉獻用として多く作られたことが、その理由であろう。

絵巻物では、鎌倉時代の『年中行事絵巻』第十二巻の梅宮大社かと思われている社殿の向拝軒先に描かれる六角型(第四図中)は簡単な形式であるが、鎌倉時代末期の『松崎天神縁起絵巻』第四巻に北野天満宮社殿の一部を描き、正面階段上方に六角型釣燈籠(第四図左)が見える。笠には蕨手があり、火袋上区は欄間として透し文様が作られ、下区にも透しがある。この下区に透しを作ることは、前記清涼殿のものにあるが、この手法の古いことがわかる。

現実の遺品としては、鎌倉・南北朝・室町時代にかけて、鍛造の板金製や鑄造の六角型のすぐれたものがあり、近世の社寺釣燈籠は六角型が全盛であった。

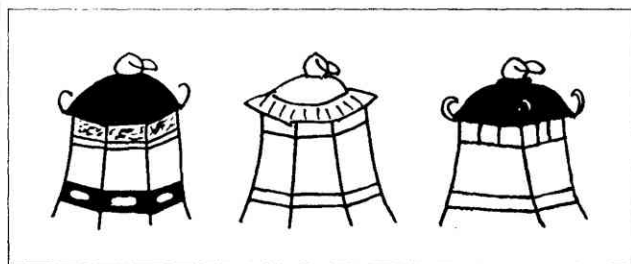
八角型 釣燈籠の八角型はきわめて少い。室町後期大永六年(一一五二六)の大津市葛川地主神社の板金製の八角型は、古い例である。どうして八角が流行しなかったかを考えてみると、六角に比べて二面多いために手間がかかるからであろう。石燈籠の場合も、中世以後は六角型が断然多いのは、同じ理由と思われる。

円型 鉄製の簡単な円型釣燈籠は、古くから行なわれたのかも知れない。永正十五年(一一五一一)在銘の京都北村謹次郎氏蔵のものは、その一例である(第五図)。笠と



第五図 旧植尾寺鉄釣燈籠

第四図 絵巻物に見る釣燈籠三種
(左)松崎天神縁起 (中)年中行事 (右)春日験記



宝珠は鑄造し、火袋は鉄の板金を鎮止めにして構造し、台と簡単な脚をつける。銘文によると、大阪府槇尾寺の旧物で、献燈用のものであるが、気の利いたものである。

異形

近世に鑑賞用として作られたものに、部分を省略した形式のものがある。今までに行なわれたのは、火袋を残して、あとはほとんどを省略した形のもので、何型と分類するほどでもないが、一応名をつけておこう。

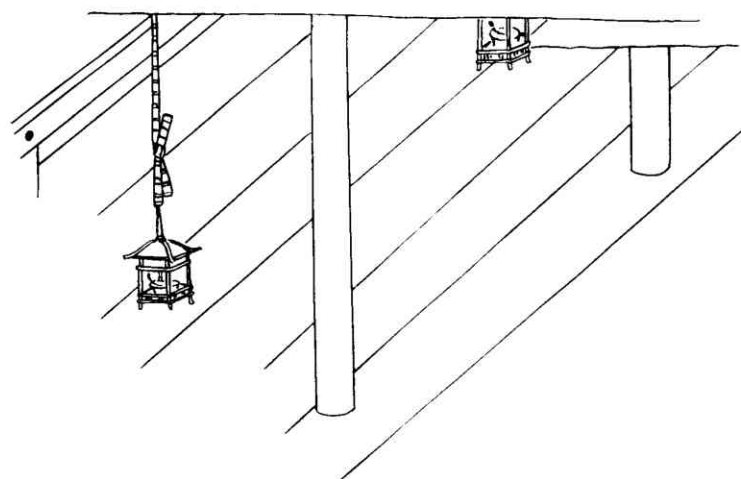
球形火袋型 このように仮称する。「天正十一年、与治良作」の陽鑄銘のある東京国立博物館蔵の鉄鑄造のものは、江戸時代の作である。おしつぶした球形で、七宝花菱文を四方に陰透しとし、下に脚三つをつけ、釣環台は簡単な弧状である。(第二〇図参照)

愛知県稲沢市愛甲昇寛氏所蔵の鉄鑄造の釣燈籠は、上下に長い球形で、七宝花菱文をくずし、盃と瓢をとり合わせて陰透しとする。脚はなく、釣環台を竜頭としたところは面白いが、このような異形は江戸時代以後の発生と考えるべきであろう。

釣燈籠の歴史については、改めて後に記述するが、社寺の献燈用のものと、住宅の照明用のものがあった。それも社寺用のものが主流であって、住宅用のものもその系列に属したので、歴史は単純であった。

前記の絵巻物で見ると、一間社の社殿の正面中央の軒先に一基を釣る献燈と、鎌倉時代の『石山寺縁起絵巻』第五巻に見る石山寺本堂外陣の天井から綱で釣った燈籠のように、いくつかの柱間に釣って、堂内の照明の用に供しているものがある(第六図)。住宅の清涼殿でも、孫庇の釣燈籠は柱間五つに五基かけられていた。このように照明用の場合は、同形のものが何基も存したのであるが、社寺への祈願のための奉献用釣燈籠は、古い時代には一基単位であったと思われるが、二基一対としている古い例には、奈良東大寺法華堂の南北朝時代のものがある。

釣燈籠考



第六図 石山寺縁起絵巻釣燈籠

三 釣燈籠の歴史

釣燈籠はいつごろから、わが国に現われるのであろうか。燈籠全体の歴史からいうと、石燈籠では奈良前期の当麻寺石燈籠、金燈籠では奈良後期の東大寺大仏殿銅燈籠があるのに対して、全然問題にならぬほど後のものである。京都国立博物館蔵の旧美濃白山中宮の鉄釣燈籠が、釣燈籠在銘最古の鎌倉末期元応元年（一三一九）の、大形で精巧な遺品として新しく登場した。奈良春日大社蔵の木造瑠璃燈籠を、社伝では宇治関白藤原頼通が長暦二年（一〇三八）二月に寄進したものであるが、その建築工芸的な細部様式を点検すると、現在のものはそのように古くは考えられない。鎌倉時代末期のものと私は推定するが、それにしても注目すべき古遺品である。

前に釣燈籠の形式について述べた時、鎌倉時代の絵巻物に石山寺や春日大社などの堂や社殿に釣燈籠のかけてある状況が描かれており、清涼殿の庇に釣燈籠をかけられたことについて記したが、いずれも平安時代までにしかさかのぼれない資料である。社殿や御堂、住宅としての清涼殿にその使用が知られるが、もっと広く貴族の住宅に釣燈籠が行なわれたのかどうか。そうした資料がほとんど求められない。私の今の研究段階では、釣燈籠が住宅一般に用いられたとする証拠は何もない。住宅の照明は室内に燈火を点じたことを知るばかりで、庇や軒に釣燈籠をかけることは、清涼殿のような特殊な宮殿においてのみ行なわれたのであろうと思う。形は後世の風を加えてとしても、近世の住宅向釣燈籠が清涼殿型といわれるもの他にないのは、そうした事情に出ているのではなからうか。

それにしても、わが清涼殿や社寺の釣燈籠の起原は日本にあるのだろうか。朝鮮や中国における釣燈籠についての知識がないので、私には全くわからない。近世の中国には宮燈とよばれる釣燈籠が使用され、その源流は古いものと思われる。わが国の釣燈籠も、そのはじめは中国・朝鮮からの伝来であろうと思うが、今後の追究が必要である。

以下、平安時代後期以降の釣燈籠の変遷を、重要遺品を中心としてたどってみよう。

平安時代後期において、清涼殿に釣燈籠が用いられたことは、平安後期の『雲図抄』（群書類従巻第八十二）の清涼殿の指図に、「額間以南反燈楼綱」と注記されるものがあり、『満佐須計装束抄』（群書類従巻第一百十二）に、「ひさしのき（軒）のとうろ（燈籠）のつな（綱）ひ

る（柱）はかへすべし」とあるのがそれで、庇の軒に綱によってかける釣燈籠が行なわれたことが知られる。それにしても、一般上流社会の住宅に関する記録や文献に、釣燈籠の使用が出て来ぬのは不思議である。室内に照明具として燈台を用いるのが一般の風で、釣燈籠の使用は特別のものであったのではないかと思われるほどである。住宅向きの釣燈籠として近世に作られたものが、すべて清涼殿型というものの系列の四角型ばかりであるのは、古代の住宅では釣燈籠の使用が広く行なわれたものではないことを語るものようである。

しかし仏堂内の釣燈籠は平安後期に行なわれている。その一例として平信範の日記『兵範記』仁平三年（一一五三）三月一日に見える能寂院小堂のものを記しておく。京都紫野知足院境内に、入道前関白藤原忠実の愛妾播磨局が建立した小堂の供養がこの日行なわれたが、仏壇上に三組の本尊を安置し、仏前に燈楼三つを懸けて燈明を供えた。すなわち仏壇上に燈台を立てないで、仏前三面にそれぞれ天井縁に栗形の金具を打ち、これに釣燈籠の金具を懸けたのである。栗形というのは四葉や六葉のような繰り形金具を天井縁に打ったものと思う。

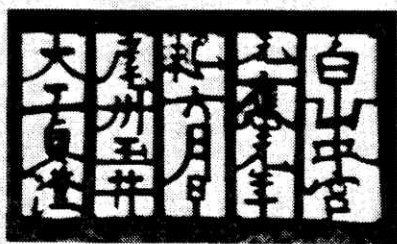
前に述べたように鎌倉時代に描かれた絵巻物には、仏堂や社殿に釣燈籠を懸けているのが、いろいろ見られる。それは遡って平安後期の情況を示すものと見て差支えないと思う。

鎌倉時代も末期になって遺品の存在を見ることができ。昭和四十九年十月十日からはじまった京都国立博物館の特別展覧会「神々の美術」の展示品の中にあつた鉄製釣燈籠は、我々を驚かす新資料であつた。早く鈴木惣一郎氏が入手されていたのを昨年京博へ寄贈されたもので、今まで世に知られなかつたのである。六角型、高さ六七センチ、鉄鍛造で、釣燈籠としては巨大なものである。台には小さい八双脚を付け、上端には擬宝珠勾欄をめぐらし、火袋では両開扉に勇壮な仁王像を陽透しとし、七宝つなぎ文、花菱文などを各所に透し、種子の梵字を配し、笠では周縁に小さい吹き返し花形をならべ、蔵手の先は猪

釣燈籠考



第七四 京都博物館鉄釣燈籠と銘文（同館「神々の美術」より）



の目型とし、烟抜きには散蓮花を陰透しとする。釣環台の宝珠に火焰状を美しく付ける。全体に安定した姿と、行き届いた技巧を示す優品である。火袋一面の下区に「白山中宮／元応元年／未六月日／尾州玉井／大工貞澄」と銘文を陽透しにする。

(第七図) この白山中宮は岐阜県郡上郡白鳥町にある白山長瀧寺のことである。現在は白山神社になっている。『美濃国長瀧資料』(昭和九・八)にはこの釣燈籠の銘文を、「長瀧寺真鏡」から引いて載せるが、実物は当時所在不明であった。

木造の釣燈籠遺品も、鎌倉末期にはじめてあらわれる。奈良春日大社の瑠璃燈籠である。六角型、高さ四五・五センチ。木造だけあって建築工芸的に作られ、とくに火袋の上区は横連子、中区は豎連子の意味を持たせて、それぞれ瑠璃色のガラスの小玉を糸に通して張る。今の小玉は後補であるが、燈火を点じた時、この無数の瑠璃の小玉が緑青色に映えるという色調の美しさを考えたのである。ゆるい勾配の屋根、火袋下区を中心飾付格狭間の形などから、鎌倉末期の製作と推定する。厨子に似た典雅な作りである。(第八図)

南北朝時代になってようやく釣燈籠の遺品は多くなる。東大寺法華堂裏外陣の執金剛神厨子の左右の柱に装置された鉄製の蜂燈籠は、置燈籠の形式に作られる。高さ五六センチ。二基一对の古い例である。釣環台の火焰宝珠の立派さをはじめ、細部手法の洗練されていることは、さすが南都名寺の遺品である。発達した格狭間や透し彫の蔦唐草の意匠から南北朝初期の作と認めてよからう。(第九図)

同じ時代の尾道浄土寺の四角型の置燈籠も二基一对とし、台座の複雑な形の格狭間、火袋上区の菱形連子の意匠、さらに笠上に二個透かした三鈷文の烟抜き孔は仏

第八図 春日大社瑠璃燈籠



第九図 東大寺法華堂蜂燈籠



具にふさわしい意匠である。高さ三七・九センチ、鑄鉄製。

在銘の釣燈籠の古いものに、神戸市須磨寺の延文五年（一三六〇）のものがある（第一〇図）。これは銅の板金で作り、鍍金されたもので、近世に流行する釣燈籠の先駆的な遺品として注目される。銅板鍍金、高さ五八センチ。六葉の花形をつけた笠がはじめて現われた。しかし火袋や台の脚はまだ春日大社の瑠璃燈籠に近い感じである。火袋の地文として牡丹の花と蕾・葉をあしらい、日本の情緒がただよう。なお須磨寺にはこの他に「二年」とあらわした火袋の板があり、近くの妙法寺にも延文二年（一三五七）の釣燈籠の部材が保存されている。

広島県厳島神社の正平二十一年（一三六六）在銘の六角型釣燈籠は高さ二八・八センチ、丸吹き鑄銅製としては古い遺品で、笠の花形は大小各六葉を交互に作る。火袋の上区を広くして堅連子にしているのが、豪健の感を与える。笠上に陰刻する銘文によると、筑前国博多講衆が寄進したもので、従って製作は筑前蘆屋の鑄物師の手によるものと思われる。（第一一図）

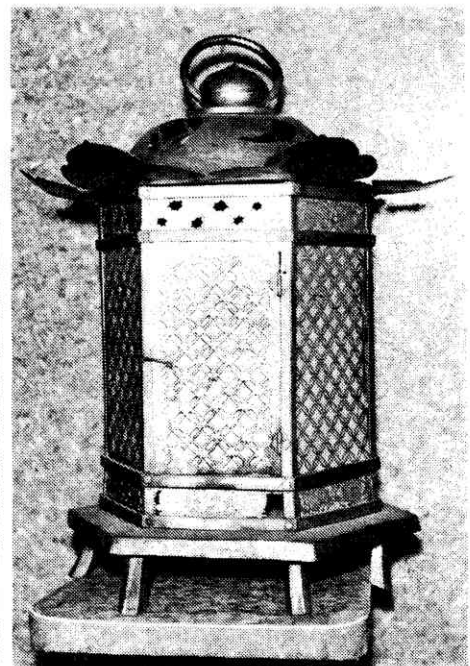
徳島県美馬郡貞光町太田の熊野神社に蔵する鉄製六角型の釣燈籠は、田中善隆氏によって先年紹介された（史迹と美術第三五九号、昭和四〇・一一）。高さ四五・五センチ、羽目板を五面とも失い、扉だけは残る。扉上方に菱形の窓をあけ、その下方に銘文を陰刻する。永徳二年（一三八二）の製作である。

以上の通り南北朝時代では、在銘の釣燈籠が僅かながらも見つかっており、これは次の室町時代遺品との比較によって、釣燈籠の流れを見きわめる上に、重要な資料である。

室町時代における釣燈籠の進展はまことに興味深いものがある。石燈籠では室町時代という

釣燈籠考

第一〇図 須磨寺釣燈籠



第一一図 厳島神社釣燈籠



と退化の時代にはいるが、釣燈籠はこの時代の金工の進歩に支えられているのである。

春日大社の多くの釣燈籠の中で、一番古い在銘の遺品が、永享十二年（一四四〇）の鉄板製八角型のもので、高さ四三センチ。かなり風化しているが、花形八葉の笠、背の高い火袋、板金の四脚などに古風を示す。春日ではそれを神前型と称し、この模造品が若宮拝殿などに用いられている。

室町時代でも釣燈籠資料の多くあらわれるのは中期からあとである。北村謹次郎氏蔵の永正十五年（一五一八）旧泉州槇尾寺鉄円型釣燈籠は板金で柱を作った簡素なもので、高さ三九センチ。この種のもは他にもかなり見いだされる。（第五図参照）

近世の鋳り金具式の板金製釣燈籠の古い遺品としては、大津市葛川地主神社の大永六年（一五二六）の八角型銅釣燈籠がある。高さ五一・八センチ。台の脚は大きい八双金具式になり、従来の簡単な脚とは趣を異にするものになった。（第二二図）

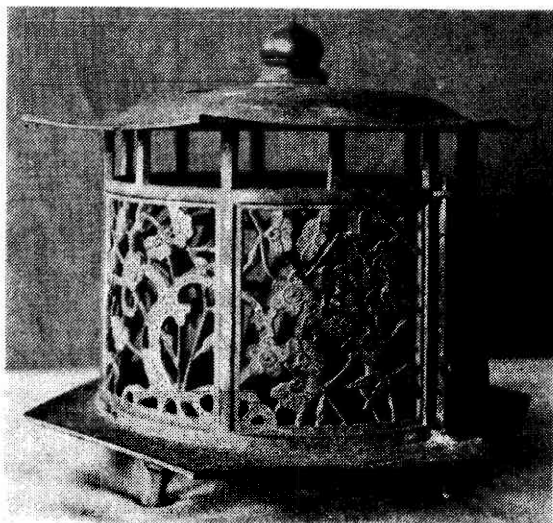
この板金製がようやく一般的になろうとする室町末期に、鑄造の釣燈籠の優作がいくつかあらわれる。そのうちでも天文十四年（一五四五）の栃木県佐野市引地山観音堂のもの、天文十九年（一五五〇）の旧千葉寺愛染堂のもの（東京国立博物館蔵）、天文二十一年（一五五二）の旧千葉庄尊光院のもの（名古屋市森川馨氏蔵）の三点は、鑄銅六角型で、高さ三〇センチに近く、火袋に梅と竹の図を絵画的に切り透した精巧なもので、豊かな日本の雰図気をもし出す。いずれも笠上に銘文を陰刻する。下野国佐野の天命の鑄物師の製作であろうと考えられている。（第二三図）

千葉県笠森寺かさもりでらの鑄銅円型釣燈籠二基はほとんど同じだが、高さ三四・五センチと三一・五センチで、寸法の大小が僅かあり、笠上に鑄出した唐草文や、頂上の切子の座の文様もちがうの

第二二図 地主神社釣燈籠



第二三図 東京国立博物館釣燈籠



で、厳密には一対とはいえない。造立銘はないが、その瀟洒な形態や唐草文の手法は室町時代後期と見てよい。(第一四図)

鑄造品はやはり感覚的に奥深さがあるが、板金製品は軽快さに特色があるといえよう。室町末期の板金の釣燈籠にも数々見るべき遺品がある。天文二十年(一五五二)の会津若松万願寺の鉄釣燈籠、天文二十四年(一五五五)の山形県寒河江市慈恩寺の鉄釣燈籠二基、永祿七年(一五六四)の奈良国立博物館蔵の鉄釣燈籠(高さ三九センチ)は、いずれも六角形で、笠の花形は葺き下ろしのままであり、火袋に日本の情趣を思わせる霞文、松・竹・梅などの文様を透し彫りして、共通した感覚を示している。この式の透しは燈火を入れると、黒地に凶案が明るく出るわけである。(第一五図)

永祿六年(一五六三)の滋賀県東浅井郡びわ村益田の麻蘇多神社の円型鉄釣燈籠は、高さ三六・三センチ、脚は板金のままとし、火袋は六区にわけ、二面の扉の短冊型に「定灯浅井」「馨庵寿松」の文字を陰透しにし、四面はさっぱりと格子にしてある。簡素の中に個性がうかがわれる。(第一六図)

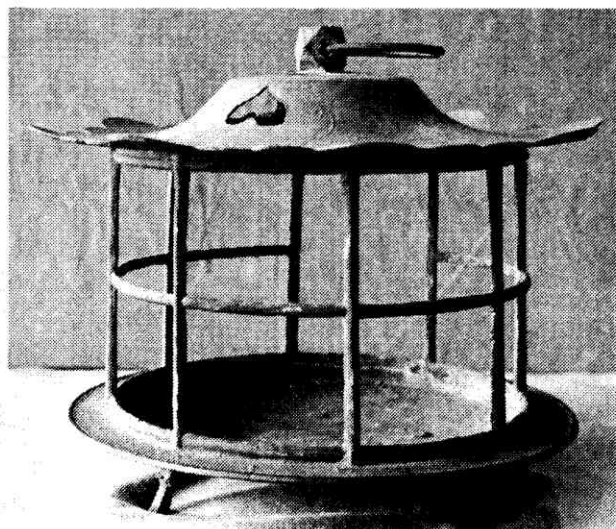
滋賀県守山市洲本町大曲のこじの己爾神社の永祿十年(一五六七)の銅板金製六角型釣燈籠は、高さ三六センチ、近世風釣燈籠形式の完成を示すものであるが、なお火袋の亀甲文や、笠の十二葉の花形吹き返しの形がおだやかである。

以上の如き室町時代釣燈籠火袋の日本の情緒の意匠は、この時代の蒔絵文様に共通するものがある興味深い。なお後來の釣燈籠火袋の一般的な意匠となった網目文・七宝つなぎ文・亀甲文は、室町時代に出そろっている。

室町時代の釣燈籠遺品はまだ多くは知られていないが、桃山時代になると春日大社をはじめ

釣燈籠考

第一四図 笠森寺釣燈籠(東博寄託)



第一五図 奈良国立博物館釣燈籠



め、信仰の盛んな各地の社寺に奉納されたものが多く遺存している。八双脚付、笠花形吹返しの六角型が一般的な中に、天正二年（一五七四）の千葉市栄福寺銅六角釣燈籠は珍しい意匠を見せている。最も特色のあるのは火袋で、中区を広くとり菱格子地に大きい円相を作り、十曜星を陰透し、今も鍍金の光沢が残っている。台の裏に臼井庄本城妙見堂の金灯炉として寄進された刻銘がある。脚を失っているが、特色のある作である。銅板金製でありながら笠が吹き返しになっていないので、古調を感じさせる。高さ二六センチ。

京都市津島潤氏所蔵の天正十四年（一五八六）の銅板製六角型置燈籠は、高さ三一・五センチ、笠は円形とし、火袋は荒い格子状に板金を切りぬいた簡単な作りであるが、三河国牛久保の牧野新次郎という人の母、梅隣芳月禅定尼が、高野山の宿坊平等院の幹旋によって奥の院燈籠堂に奉納したものである。高野山燈籠堂へは古来おびただしい献燈があつたが、この置燈籠はその一つで、信者の誠心のこもる遺品として、心をひかれる。

奈良県長谷寺の板金製六角釣燈籠は天正十六年（一五八八）の製作で、高さ六五・五センチ。大和言豊臣秀長（秀吉の弟）の姫君三八女のために当寺本尊に捧げられたものである。笠の六方の隅ごとに風鐸を懸けている。風鐸を懸ける金具の残っているのは、南北朝の東大寺蜂燈籠や春日大社鬼面燈籠などに例はあるが、風鐸が保存されるものとしては長谷寺のこれが珍しい例である。

滋賀県長浜八幡宮に蔵する二基の円型鉄釣燈籠は、慶長四年（一五九九）と同十二年（一六〇七）の製作で、前者は高さ四〇センチ、松皮菱や格子の火袋、後者は高さ



第一七圖 長浜八幡宮釣燈籠



第一六圖 麻蘇多神社釣燈籠

三九・七センチ、巴文をあしらった格子の火袋に特色がある(第一七図)。ともに桃山時代らしい豪放さがあり、また大変重量のある釣燈籠である。慶長八年(一六〇三)の兵庫県中山寺の鉄六角釣燈籠もこれに似たものだが、火袋は格子文だけで変化にとぼしい。

板金製八双脚付、笠花形吹返し釣燈籠は桃山時代からあと目だって多くなる。それらはやがて千篇一律のものになって行くが、慶長十年(一六〇五)に大久保石見守長安が奉納した足利市ばんなじ鑿阿寺の六角釣燈籠は、高さ四五・五センチ。火袋の文様に個性があり、その美しさで最高のものである。昇り藤を中心とした唐草文の切り透しには、今も鍍金の光りが残っている。

春日大社の慶長十八年(一六一三)の鬼面釣燈籠は釣環に鬼面がある。鉄製六角型で、高さ五三センチ。火袋上区の巴文と中区の花狭間の透し文様は特色があり、全体として非常に建築工芸的な獨創性を示す名品である。(第一八図)

春日大社ではこの他にも天正十二年(一五八四)の木製六角釣燈籠が現存する。黒漆塗、彩色を施して本来華美なものだが今は剥落している。重さ五〇センチ。珍しい遺品である。

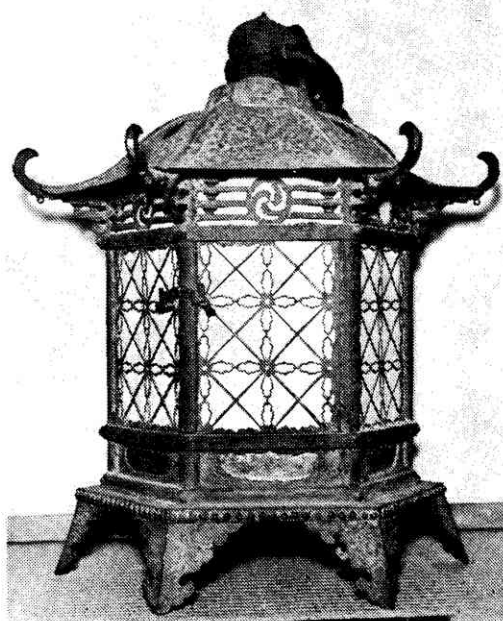
(第一九図)

桃山時代もまた釣燈籠に秀作の多い時期であった。

社寺の釣燈籠も江戸時代には各地に作られて遺品はおびただしいが、前代以来の銚り金具式の八双脚、笠花形吹返しの形式、あるいはその部分の誇張されたものがほとんどである。その中において、京都府相楽郡木津町鹿背山の西念寺の六角型釣燈籠は、鉄板金製の単純な作で、高さ四五センチ。六隅の柱の上下をのぼして巻いている手法が面白い。底裏に文

釣燈籠考

第一八図 春日大社鬼面釣燈籠



第一九図 春日大社木釣燈籠



釣燈籠考

政七年（一八二四）の刻銘がある。

江戸時代の釣燈籠には、住宅向のものとして、清涼殿型という四角型釣燈籠と、これと同系の形を示す春日大社の御験記型釣燈籠などが行なわれたが、この形式がどの時代まで遡るかは明らかでない。

また東京国立博物館蔵の天正十一年与治良作の文字を陽鑄する球形七宝花菱文鉄釣燈籠は、従来の釣燈籠の形式を打破した点に興味があるが製作年代が天正まで上るものとは認められていない。江戸時代とするとしても、その例証になるものを求めていたところ、一昨年（昭和二十九年）の初夏、京都府南山城町椿井の松尾神社において、同式の在銘遺品を見つけた。鉄鑄造で、総高二三・五センチ、球形火袋の直径も同じ。下端に三脚、上端に釣環台を作り、火袋四面に七宝花菱文を陰透しする（第二〇図）。東博のは直径三〇センチで、わずかに大きいのが、よく似たものである。松尾神社のものには次の陽鑄銘が、腐蝕しながらも辛うじて読みとれた。

上 狛 村

村 内 安 全

林 村

椿 井 村

奉 獻
御 靈 牛 頭 天 王

五 穀 成 就

天保十五甲辰年

九月吉日

江戸時代末に近い天保十五年（一八四四）に氏子の村々から奉納したものである。江戸時代にこの式の釣燈籠が行なわれたことを証明する一資料である。

以上、わが国釣燈籠について、手許に集った資料によって、あれこれと述べた。紙数の制約もあって、不満足な内容ではあるが、今後の釣燈籠研究のための参考となるならば、筆者の喜びこれに過ぎるものはない。



第二〇図 椿井松尾神社釣燈籠

最後に多くの社寺や先学から与えられた厚情、学恩に対し、謹んで感謝の意を表する。
 なお以下に、桃山時代までの釣燈籠の年表を付載する。利用されると同時に、種々の御示教に預ることを期待するものである。

主要釣燈籠年表 (慶長以前) 昭和五〇・八、川勝作成

紀年	西曆	名称・所在地	紀年	西曆	名称・所在地
元応元	一三一九	鎌倉時代 京都国立博物館(鉄) 京都市東山区七条東大路	無紀年		東大寺法華堂二基(鉄置) 奈良市雑司町
無紀年		春日大社(木) 奈良市春日野町	〃		浄土寺二基(鉄置) 広島県尾道市尾崎町
延文二	一三五七	南北朝時代 妙法寺(銅残欠) 神戸市須磨区妙法寺町	永享一二	一四四〇	室町時代 春日大社(鉄) 奈良市春日野町
延文五	一三六〇	須磨寺(銅) 神戸市須磨区須磨寺町四丁目	寛正二	一四六一	神野神社笠(銅) 香川県仲多度郡満濃町
正平二一	一三六六	厳島神社(銅) 広島県佐伯郡宮島町、重文	永正七	一五一〇	高野山収蔵庫(鉄) 和歌山県伊都郡高野町
永徳二	一三八二	熊野神社(鉄) 徳島県美馬郡貞光町太田	永正一五	一五一八	北村家(鉄) 京都市上京区河原町今出川梶井町
			大永五	一五二五	高野山収蔵庫(鉄) 前出

釣燈籠考

釣燈籠考

大永六	一五二六	地主神社(銅) 大津市葛川坊町 (現在比叡山宝物館)	永祿八	一五六五	春日大社(銅) 前出
大永七	一五二七	当麻寺(銅) 奈良県北葛城郡当麻町	永祿九	一五六六	高野山収蔵庫(鉄) 前出
天文二四	一五四五	引地山観音堂(銅) 栃木県佐野市南富岡町、重文	永祿一〇	一五六七	饗庭家(銅) 浦和市中尾(現在浦和郷土博物館)
天文一九	一五五〇	東京国立博物館(銅) 東京都台東区上野公園、重文	永祿一一	一五六八	己爾神社(銅) 滋賀県守山市洲本町大曲
天文二〇	一五五一	万願寺(鉄) 福島県南会津郡下郷町弥五島(現在会津若松城博物館)	永祿一二	一五六九	高野山不動院(鉄) 前出
天文二一	一五五二	森川家(銅) 名古屋市千種区菊坂町、重文	元龜二	一五七一	談山神社(銅) 奈良県桜井市多武峰
天文二四	一五五五	慈恩寺二基(鉄) 山形県寒河江市慈恩寺	元龜三	一五七二	春日大社(鉄) 前出
弘治三	一五五七	普門寺(鉄) 愛知県豊橋市雲谷町	無紀年		高野山収蔵庫(鉄) 前出
永祿六	一五六三	麻蘇多神社(鉄) 滋賀県東浅井郡びわ村益田			笠森寺(銅) 千葉県長生郡長南町笠森(現在上総博物館) 重文
永祿七	一五六四	奈良国立博物館(鉄) 奈良市春日野町、重文			同(銅) (現在東京国立博物館) 重文
					渡辺家(銅) 千葉県夷隅郡大多喜町久保(現在上総博物館)

天正二	一五七四	桃山時代 高野山収蔵庫(鉄)和歌山県伊都郡高野町	天正一四	一五八六	津島家(銅置)京都市上京区烏丸今出川下ル西入
"	"	福住家(銅)奈良市中御門町	天正一五	一五八七	高野山収蔵庫(鉄)前出
"	"	談山神社(銅)奈良県桜井市多武峰	"	"	白山神社(鉄)岐阜県郡上郡白鳥町長滝
"	"	栄福寺(銅)千葉市大宮町	天正一六	一五八八	長谷寺(銅)奈良県桜井市初瀬町
天正三	一五七五	大覚寺三基(鉄)京都市右京区嵯峨大沢町	天正一九	一五九一	春日大社(鉄)前出
"	"	西本願寺(鉄)京都市下京区堀川七条北	"	"	同(銅)前出
天正七	一五七九	当麻寺西南院(銅)奈良県北葛城郡当麻町	天正二〇	一五九二	高野山不動院(鉄)前出
天正八	一五八〇	熊野神社(鉄)広島県三次市島敷	文禄二	一五九三	岩倉寺(鉄)島根県能義郡広瀬町
天正一〇	一五八二	八幡神社(鉄)広島県三次市	"	"	春日大社(鉄)前出
"	"	八剣社(銅)愛知県一宮市萩原町中島	文禄四	一五九五	同二基(銅)前出
天正一二	一五八四	春日大社(木)奈良市春日野町	"	"	同(鉄)前出
"	"	高野山不動院(鉄)前出	慶長元	一五九六	以下春日大社釣燈籠は慶長一八の一基の他を省略
天正一三	一五八五	伝香寺二基(銅)奈良市小川町	慶長二	一五九七	同(銅)同
					日吉大社(鉄)大津市坂本本町
					北野天満宮二基(銅)京都市上京区御前通今小路

釣燈籠考

釣燈籠考

慶長三	一五九八	北村家(鉄) 京都市上京区河原町 今出川梶井町
慶長四	一五九九	高野山収蔵庫(鉄) 前出 室生寺(鉄) 奈良県宇陀郡室生村 室生
慶長五	一六〇〇	長浜八幡宮(鉄) 滋賀県長浜市宮 前町 旧杉浦家(銅) 京都市中京区三条 柳馬場東旧在
慶長六	一六〇一	北野天満宮(鉄) 前出 法華寺(銅) 奈良市法華寺町 浄信寺(銅) 滋賀県伊香郡木之本 町
慶長八	一六〇三	旧杉浦家(銅) 前出 枚岡神社(銅) 東大阪市出雲井町 中山寺(鉄) 兵庫県宝塚市中山寺 高野山収蔵庫(鉄) 前出
慶長一〇	一六〇五	同 (鉄) 前出 鑊阿寺(銅) 栃木県足利市家富町 (現在東京国立博物館)
慶長一一	一六〇六	法隆寺聖靈院(銅) 奈良県生駒郡 斑鳩町法隆寺
慶長一二	一六〇七	談山神社(銅) 前出 旧杉浦家(銅) 前出
慶長一三	一六〇八	当麻寺本堂(銅) 前出 長浜八幡宮(銅) 前出
慶長一四	一六〇九	弘津家(銅) 山口県熊毛郡平生町 法隆寺聖靈院二基(銅) 前出
慶長一五	一六一〇	同 三基(銅) 前出 龍安寺(鉄置) 京都市右京区龍安 寺御陵ノ下町
慶長一六	一六一一	弥彦神社二基(銅) 新潟県西蒲原 郡弥彦村
慶長一七	一六一二	法隆寺聖靈院二基(銅) 前出 同 (銅) 前出
慶長一八	一六一三	当麻寺本堂(銅) 前出 談山神社二基(銅) 前出 北野天満宮(銅) 前出
慶長一九	一六一四	富吉建速神社(鉄) 愛知県海部郡 蟹江町

慶長一八	一六一三	春日大社(鉄)前出
〃	〃	岩屋寺二基(銅)愛知県知多郡南
〃	〃	知多町山海
無紀年	〃	法隆寺聖靈院(銅)前出
〃		松田家(鉄)奈良市肘塚町
〃		北村家(銅)前出
〃		豊国神社二基(銅)京都市東山区
〃		大和大路正面
〃		涉成園(銅)京都市下京区間之町
〃		中珠数屋町